

楽園の島を脅かす
プラスチックの輸入品

「昔はもつときれいな場所だったのに……」

約1000もの島々から成る国ソロモン諸島。熱帯ならではの美しい景観が広がる中、特にこの数年は、首都ホニアラでそんな声があちこちから聞かれる。

まさにその原因となっているのが、東部沿岸にあるごみの集積場だ。山のように積み上げられたごみは、酸化して自然発火し、常に煙が立ち上っている状態。私たちがイメージする美しい情景とは異なる現実には、ホニアラのジョージ・ティティウル環境保健部長は頭を悩ませていた。

ごみ問題には、地元の人たちの

ライフスタイルの変化が関係している。輸入品が増加し、ごみの多くは、これまでほとんど使われていなかったプラスチック製品。時間がたてば土に返る生ごみとは違い、分解されにくく「ごみ」としてそのまま残ってしまう。リサイクル処理する施設がないために分別収集が進まず、至る所に放置されたままになっているのだ。

ソロモン諸島に美しさを取り戻

from ソロモン諸島

Solomon Islands

ホニアラ

自治体の経験で
島をきれいに

都市部への人口集中やプラスチック製品の増加などが原因で、ごみが増え続けているソロモン諸島の首都ホニアラ。今必要なのは、地域ぐるみで解決に挑むこと。その取り組みに、日本の経験が生きている。



「日本の経験が役立つなら」と、プロジェクトメンバーの一員として西宮市の企業が廃棄物処理に関する技術やごみ収集車両の仕組みを伝えている



岸本さんとごみの収集ポイントを回り、膨大なデータを集めるダミアンさん。日本の小学校の視察を機に、「子どもたちへの環境教育に力を入れたい」と意気込む

ファティ市長は政策の柱として廃棄物問題改善を掲げ、現場の視察にも積極的だ



ホニアラにあるごみ集積場。鼻をつく悪臭の中で、地元の人々はリサイクルできる缶などを探している



と考えました。そうして立ち上がったのが「ホニアラ市官民協働会議」だ。

環境学習都市・西宮市の経験を生かしたい

そして今、彼らがLEAFのスタッフと共に力を入れているのが「ニュー3R」普及に向けたきつかけづくりだ。ニュー3Rとは、今やよく知られるようになった3R※の「リサイクル」を「リターン」に替え、資源を再資源化できる国への逆輸出を目指すもの。ソロモン諸島ではリサイクル産業が広まっていない。そこで、まず分別収集体制を確立し、輸入されたプラスチックを輸出国に返すことを目標にしたのだ。

小川さんたちが参考にしているのが、日本の自治体の経験だ。2003年に環境学習都市宣言をした西宮市は、行動憲章に基づき、市民の環境学習を推進するとともに、大洋州の環境分野の行政職員を研修員として受け入れるように。市内の清掃工場やリサイクル業者、小学校の環境教育の授業などの視察を通じて、日本の廃棄物処理の仕

組みや環境教育の経験を伝える。

ホニアラのティティウルさんとダミアンさんも、日本での研修で大きな感銘を受けて帰ってきた。「ごみ一つ落ちていない日本の街並みは、ごみ拾いやリサイクルの徹底など市民一人一人の努力によって保たれていることを実感しました」。そして今、日本で学んだことをホニアラのごみ問題の解決に生かそうと意気込んでいる。

一方、小川さんは「近代化した日本にも矛盾がある」と指摘する。「リサイクル産業が進む一方で、原材料の生産、製造加工、流通、販売、消費、資源回収、再生品化、消費という一連の流れが維持できていない。日本と同じ方法ではなく、ソロモンに合ったやり方を見つけてほしい」と考えている。

プラスチックを輸出入する国々との歩み寄りが必要なニュー3R。長い道のりだが、市民一人一人がまずごみを減らす努力をし、これまで廃棄していたごみが、資源になることに気付くことが大切だ。

それがニュー3Rを根付かせるための一歩になると信じ、LEAFは現地の人たちと共に挑戦を続けていく。

※リデュースII減らす、リユースII再利用、リサイクルII再資源化の略称。



「右」ホニアラ市官民協働会議の前座となる顔合わせ会を2014年11月に実施。西宮市のエココミュニティー会議を参考に、市民、企業、行政が一体となった取り組みを目指している
「左」ニュー3Rについて説明する小川さん